

2022.8.14 主日礼拝

聖霊降臨節第11主日礼拝（家庭で礼拝を守る場合の式順）

黙 禱

聖 書 ペトロの手紙 I 3 章 13-16 節

説 教 「生きる姿で伝道を」 牧師 三浦 啓

讃美歌 402 「いともとうとき」

献 金

黙 禱

ペトロは、9節で「悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい」と勧めています。自分に敵対する者を愛し、迫害する者のために祈ることはとても難しいことです。そこでペトロはダビデの詩篇を引用し、「主の目は正しい者に注がれ、主の耳は彼らの祈りに傾けられる。主の顔は悪事を働く者に対して向けられる」と語り、すべてを主にゆだねるようにと語りました。きょうの箇所はその続きです。つまり、悪をもって向かってくる相手にどのように対処したらよいかのかがテーマです。

13-14節に、「もし、善いことに熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。しかし、義のために苦しみを受けるのであれば、幸いです。人々を恐れたり、心を乱したりしてはいけません」とあります。

この手紙は、ペトロからローマの迫害によって、さまざまな地域に散らされ、寄留していたクリスチャンに宛てて書き送られたものです。彼らは圧倒的多数の異邦人社会の中で、また、数は少ないながらもキリスト教に反感を持っていた保守的ユダヤ教徒に囲まれながら、見える形、見えない形のさまざまな圧迫を受けて苦しんでいました。そうした彼らを励ますためにペトロは、悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです、と勧めました。そして、ここでは「もし善いことに熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう」と言っています。どういうことでしょうか。

普通、たとえ人種が違って、宗教が違って、良いことをする人は回りの人から認められ、尊敬されます。たとえば、目の前で困っている人を助けたり、支えている人は周りの人たちからも認められ、尊敬されるようになるでしょう。それはどんな宗教を持っているかということとは関係ないのです。そのような人は、たとえ周りの方が攻撃しようとしてもその口実さえも与えないでしょう。たとえ義のために苦しむことがあっても、迫害されることがあったとしても、自分は正しいことをしている、神様の御言葉やイエス様の教えを実践していると胸を張ることができますし、そのような生き方をする人は神様のお守りの中で幸せな歩みへと導かれるはずで

皆さんは、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」という詩をご存知だと思います。この詩はある一人のクリスチャンがモデルになっていると言われています。そのクリスチャンとは斎藤宗次郎という人で、岩手県花巻市で最初にクリスチャンになった人です。斎藤さんは1877年、岩手県花巻で、禪宗の寺の三男として生まれました。15歳の時、母の甥にあたる人の養子となり、斎藤家の人となります。斎藤さんは小学校の先生となり、ふとしたきっかけで内村鑑三の著書に出会い、聖書を読むようになりました。そして1900年に信仰告白をし、洗礼を受けてクリスチャンになるのです。

斎藤さんがクリスチャンになったのは、キリスト教が「耶蘇教」とか、「国賊」などと呼ばれていた時代のことです。クリスチャンとして生きていくことがどれほど苦しい時代であったかわかりません。洗礼を受けたその日から、彼に対する迫害が強くなりました。親からは勘当され、以後、生家には一歩たりとも入ることを禁じられてしまいます。町を歩いていると「ヤソ、ヤソ」とあざけられ、何度も石を投げられました。近所で火事が起きた時には、全然関係ないのに家の窓ガラスを割られたこともありました。いわれなき中傷を何度も受け、ついには小学校の教師を辞めさせられてしまうのです。

迫害は斎藤さんだけにとどまらず、家族にまでも及んでいきました。長女の愛子さんはある日、国粹主義思想が高まる中、ヤソの子供と言われて腹を蹴られ、腹膜炎を起こし、何日か後に、9歳という若さで亡くなりました。その葬儀の席上、賛美歌が歌われ、天国の希望のなかに平安に彼女を見送りましたが、愛する子を、このようないわれなきことで失った斎藤さんの胸の内はどのようなものであったか、察するに余りあります。

斎藤さんはその後、新聞配達と牛乳配達をして生計を立てました。雪の日には、朝の仕事が終わる頃、小学校への通路の雪かきをして道を作りました。小さい子どもを見ると、抱っこして校門まで走ったと言われています。雨の日も、風の日も、雪の日も休むことなく、地域の人々のために働き続けました。病気の人があると聞きつけると、新聞配達の帰りに、病人を見舞い、励まし、慰めました。彼は、「でくのぼう」と言われながらも最後まで愛を貫き通したのです。

その斎藤さんが、内村鑑三の勧めで上京することになりました。1926年、住み慣れた故郷を離れ、東京に移る日、“誰も見送りに来てくれないだろう”と思って駅に行くと、そこには、町長をはじめ、町の有力者たち、学校の教師、またたくさんのお弟子たちが見送りに来ていました。中には神社の神主や僧侶もいました。さらに一般の人たちも来ていて、駅は身動きができないほどでした。それで駅長は停車時間を延長し、汽車がプラットホームを離れるまで徐行させるという配慮をしたほどです。その群衆の中に、実は若き日の宮沢賢治がいたのです。

「雨ニモマケズ」の詩は、この時の感動に基づいて、彼の生きざまを書かれたも

のだと言われているのです。

この詩の締めくくりに「そういう者に私はなりたい」とあります。これは宮沢賢治の思いが込められています。斎藤さんがそれだけ多くの人々に愛されていたのは、斎藤さんが普段からしていたことを、周囲の人たちが見ていたからなのです。斎藤さんは、人にほめられたいなど、人を基準にして生きていたのではなく、ただ、神様を、イエス様を基準に物事を考え、キリストと同じ思いを感じることができるように変えられていたのです。人々は斎藤さんの内側から醸し出されていたキリストの香りを感じ、彼を通して表されたイエス・キリストを見ていたのです。

この斎藤さんのキリスト者として歩みを通し、自分もそのように周りの人に言葉以上に人を愛する姿勢を示す者でありたいと思わされます。もしそのような生き方を実践できるのであれば、たとえそのキリスト者として姿を周りの人から嘲笑されたり、馬鹿にされたとしても、心は揺らぐことがないように思います。

さて、15節から17節にかけて「キリストを主とあがめなさい」ということが記されています。

人から脅かしを受けているときに、何も言えないときがあります。ただ我慢するしかないと思う時、ただそのように防御的になるだけでなく、もっと積極的にすべきことがあります。それは、心の中でキリストを主としてあがめることです。キリストを主としてあがめるとはどういうことでしょうか。この「あがめる」という言葉は、原語で「ハギアゾー」という言葉が使われていて、これは「きよめる」ということを意味しています。なので、この箇所を直訳するならば、「むしろ、心の中でキリストを主としてきよめなさい」となります。キリストをきよめなさいと言っても、キリストはもともとときよい方ですから、きよめる必要などありません。では、「キリストをきよめなさい」とはどういうことなのでしょう。それはキリストをきよい方として尊びなさいとか、敬いなさいということ。たとえ義のために苦しむことがあっても、彼らの脅かしを恐れたり、心を動揺するのではなく、キリストがすべてを支配しておられることを認めて、信頼しなさいということ。す。

そればかりではありません。ここには、「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」とあります。「あなたがたの抱いている希望」とは、ペトロの手紙Ⅰ1章3節に記されている「イエス・キリストの復活」のことを指しています。私たち一人ひとりが勝手に自分に合った希望を想像するのではなく、私たちが愛してくださっている神様が独り子であるイエス様を犠牲にされること、私たちと共に歩んでくださるイエス様が私たちのために十字架へと歩まれたこと、そしてイエス様が十

字架の死から復活されたことに希望を見出すということです。この希望について説明を求める人には、生き生きと、いつでも弁明できるほどに胸の内に希望を抱いていなさいということです。

ペトロはここで、「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明しなさい」ではなく、「弁明できるように備えていなさい」と言っていることに注目したいと思います。私たちは、誰かに悪口を言われた時などそれにすぐに反応して言い返してしまうことがあります。その結果どうなるかという、争いがおさまるところかますますエスカレートすることも少なくありません。しかし、悪口を言われてもじっと我慢して、すぐに言い返すのではなく一呼吸おいて静かになると、相手が心を開いてくることがあります。

以前、共愛学園で聖書を教えていた時に、授業の最後に授業の感想などを生徒に書いてもらっていました。みんな授業をよく聞いて、ノートにはいろいろな感想や質問、悩み事を書いてくる子もいました。それを見させてもらい、こちらも返事を書くようにしていました。ある時、聖書科の望月先生から「先生、聖書の授業の感想に否定的な事を書いてくる生徒がいる場合、どのように返事を書いていますか」と質問を受けました。望月先生も授業の最後に生徒に感想を書いてもらっていたのです。もちろん、生徒の中には聖書の授業内容に対して否定的な事を書いてくる生徒もいます。私の場合は、たとえ否定的な事を書いてきたとしても、その意見を受け取り、“私はこういう風に考える”、“こういうことを大切にしている”と書くようにしています。望月先生にもそのように伝えました。否定的な意見に腹を立てて、強い意見を返しても、恐らくその生徒に聖書に記された内容やキリスト教の良さは伝わらないはずです。私の場合、否定的な内容の事を書いてくる子に丁寧に返事を返し続け、11月くらいになると、次第にその子を書いてくる感想に変化が生まれ、最後にはかなり肯定的な授業の感想になっていきました。

その経験から、“伝道は積み重ねが大事なのだ”と感じました。こちらから一方的に聖書のことを説明したり、正しいと思うことを強く主張するのではなく、相手の話をよく聞き、たとえ否定的な事を言われたとしても、キリスト教の良さを丁寧に、相手に伝わる言葉で語っていく。それが弁明するということなのです。そのためには、今日の聖書箇所にあるように、いつでも、だれにでも、弁明できる用意をしておかなければなりません。その用意とはよく聖書を学ぶというのは勿論ですが、それを自分の生活にあてはめ、その御言葉に生きるということが大切です。なぜなら、そのような御言葉の実践が大きな裏付けとなるからです。口数よりも生きる姿が伝道となるような歩みを進めていきたいと思います。

(牧師 三浦 啓)